

昭和二十四年一月十五日発行(毎月一回十五日)種郵便物認可

(通第三二二号)

近角先生著書の刊行を喜びて	墨生	(1)
近角常観師を憧憬して	松村すすむ	(6)
友に導かれて	和才誠司	(8)
ただ落ちていく	西元宗助	(10)
親鸞聖人の横顔	花田正夫	(16)

慈光

第十九卷

第一号

近角先生著、「懺悔録」の刊行をよろこびて

聚 墨 生

「信仰余瀝」は、明治三十三年、「懺悔録」は明治三十八年に出版せられ、その後十幾版と世の要望にこたえて刊行されました。この書によつて幾多の人々が、暗夜に燈火を与えられ、餓え渴く身に甘露の法水を恵まれました。

かえりみれば、昭和十六年十二月二日、太平洋戦の布告の寸前に先生は亡くなられました。次いで敗戦の大混乱となり、先生の著書の再版を求める声の各地に切々たるものがありました。その機の熟しませぬうちに御令弟の常音先生もそのことにお心を碎かれつゝ亡くなられました。その後、御令息の真觀様もそのことをいつも祈念していられましたが、幸に京都の文明堂の長谷川さんの懇望によつて、ここに両書の刊行のはこびとなりました。年頭にあたりこの喜びのあまり、両書の御紹介を申上げます。

信仰余瀬

近角先生の外遊中に出版せられましたが、その時の清沢満之先生の序文は、

試みたる一人なり、乃ちこの小冊子の内容も亦其一端なり。君さきに自家の信界を表白してこれを「政教時報」に連載せり。これもとより君が信仰の余瀬に過ぎざるもの、未だ以て君が信仰の全般を尽所能わざと雖も、君が如何に宗教を観取し、如何にこれを実験し、如何にこれをお味せるかは、此数篇の間に於いてこれを管見し得べきが如し。

今や四方の士、しきりにこの篇集出版を勧誘する者ありと聞く。然らば即ち此数篇の文字は極めて僅少なりと雖も、既に幾多の要求の満足し、更に幾多の供給にあたらんとするに足るものなり。書して以て序と為す。

明治庚子臘月 於樹心窟

臘扇生満之識

第三版（明治三十六年）の時の近角先生御自身の序文を誌します。

宗教の眞髓は内心の奥底に実験する救済にして、信仰の極致や天然の現象、人生の出来事に於いて森羅なる靈勅を感じるに至る。心を潜めて人生の帰趣を観するに、恰もこれ萬尋の深抗、架するに朽床を以てし、晏座その危きを悟らざるが如く、盲人の断橋を渡り相率いて蒼に墮落するが如し。

宗教は人心をして其根蒂を自覚せしむるものなり。信仰は即ち其自覚なり。社会にして宗教を欠くは、其發展の一大要素を欠くなり。個人にして信仰の立たざるは未だ其根本的不明を断ぜざるなり。

吾人の從來する所如何、吾人の趣向する所如何、吾人の価値は如何、吾人の運命は如何、およそ此等、吾人人生の最大問題は一として最後の信仰に繫触せざるものあることなし。

宗教的自覺の世道人心に必要なること論を待たざるなり特に社會的開展の大運行を為す時に於いて最も然りとす今や我國家は制度文物の上に於いて一大開展の歩を進めつつあるにあらずや。確固たる信仰の此際に必須なるもとより其処なり。社會の潮流はしきりに其供給を迫り来ること、近時宗教を喚呼する声の甚大にして信仰の告白する説の甚盛なるが如きは、皆以て徵とするに足る。近角君の如きは最も早く此声に聞き、最も早く此告白を

予や明治三十年、端なくも苦悶の暗黒界に彷徨し、心中すべての煩惱を実験し、口言う能わず、座に堪うべからず、八ヶ月の間、宇宙暗澹として黒烟を以て包まれ、精神昏昧にして頑石の野外に横わると選ぶなきに至れり。慶ばしき哉、仏陀慈愛の光明は、予が闇黒の胸底を直射し給い、仏陀靈活の生命は、予が乾燥せる心肺を潤沢し給えり。一日仰いで蒼穹を望む、慈光世界に満ちて精神遙かに雲間の碧空と交り、俯して四圍の同胞に對す、愛情面に溢れ、万靈融和の樂土に在り。ここに一生を九死の間に得て、内心深く仏陀の矜哀を感謝し、好んで他人の経験を聞きてはなはだしく心絃の共鳴を楽しむ。およそ一年を経て偶々教界事あり、切に仏陀の靈勅を感じず。三十三年一月「政教時報」を発刊するに及び、信界の一欄を設け「靜觀錄」と題していさか心殿の秘奥を披露す。文字修飾をもちせず、一に懺悔と感謝との実感を告白するを主とせり。これ事に触れ、時に隨い心中に感得したるところ、各章何等の関連を存するものなし。然れども今にして之を思う、自ら是れ當時一年半における信仰経過の日乗なり。

第一篇「宗教的同朋」は苦悶後、救済の実験を描けるもの。第十五篇「信念の修養は實際問題に如くはなし」は佛勅を感じる昭々として其極に達したる時直写したる所

いすれも深く思慮を費したるものにあらずと雖も、筆を執るや、一日忙中一室に閉居して冥想静觀ごとに肅々として一種森厳の感に打たれたる、今なほ記憶するところなり。

三十三年、予が航西の後、親愛なる師友は、これを蒐集して剖版に附し、目するに「信仰余瀝」を以てし、冠するに凱切なる序文を以てせらる。海外万里、遙かに一本を得て、深く恩厚を仰ぎ、切に友情を感じり。其後版を重ね四方信友の心説を辱うしたるは最も感謝するところなり。

今や第三版を出すに及び、自ら魯魚の誤を正し、附録として在外中、聖經に對する実驗を披瀝する一文を添え、附録と初めて自序を加う。

ここに熟々過去を追懷して深く仏陀の冥祐を銘し審さに現在を默想して切に靈界の威神を感じ。此篇を繙く求道の諸士、庶幾くは求哀懺悔してとこしえに救濟の光を仰ぎ覗しく靈勅の声に聴かれんことを。

明治三十六年二月十七日

求道學舍 静觀室に於いて 近角常觀識

一、宗教的同朋

信仰余瀝 目次

- 一、仏陀を近きに求めよ
- 二、信念の修養は實際問題に如くはなし
- 三、生きんが為に働くべからず、働くが為に生く
- 四、仏陀の真実
- 五、我を捨てんと欲すれば捨つる能はず
- 六、仏の人格
- 七、地を固く踏めされど常に歩を進めよ
- 八、信界に於ける監獄
- 九、詩的信仰は一種の懈慢界なり
- 一〇、宗教心は最も健全なる意識に外ならず
- 一一、因果應報は宗教的自覺なり
- 一二、相對世界の真相
- 一三、生きんが為に働くべからず、働くが為に生く
- 一四、仏陀を近きに求めよ
- 一五、信せんと欲して信するに非ず、信せざるべからず
- 一六、信せんと欲して信するに非ず、信せざるべからず
- 一七、靈化物化
- 一八、信するとは力を信する也
- 一九、自然の法則
- 二〇、仏陀の真実
- 二一、涅槃の極致、蘭林の遊戯

附録

- 一、讀經余瀝
- 二、予が宗教的實驗

懺悔錄

明治三十八年六月に初版が出ました。思えば日露の大戰の終わつた年とて、「一將功成りて万骨枯る」の悲喜交錯の國を擧げての大戦の時であります。其後大正、昭和と版を重ねられて昭和八年には第十七版の發行となつて世間の要望にこたえられました。先ず先生の序文を誌します

如來は一切の為に常に慈父母と作り玉えり

當に知るべし諸のは衆生は皆是れ如來の子なり

世尊大慈悲衆の為に苦行を修し玉うこと

人の鬼魅に著せられて狂乱の所為多きが如し

是れ阿闍世王大煩悶に陥り、仏陀の大慈悲に接したりし

時、仏德を讚嘆したる涅槃經偈頌の句であります。

あるゆえ、代れるものなら代りて遣りたい」と云われ

た言は、恰も頻婆沙羅王が空中より阿闍世王に告げ導かれたる言の如く思われます。又私が熱病に悶え苦しんでいた時、母が心配して少しも眼らず、日夜看病して下さつたことは、韋提希夫人が冷薬を以て、阿闍世王の瘡に塗られたと全く同様に感じます。「生育我身大悲母西方

二、活ける懺悔

三、外柔にして内剛なるべし

四、声を聞くべし光を見るべし

五、我を捨てんと欲すれば捨つる能はず

六、仏の人格

七、地を固く踏めされど常に歩を進めよ

八、信界に於ける監獄

九、詩的信仰は一種の懈慢界なり

一〇、宗教心は最も健全なる意識に外ならず

一一、因果應報は宗教的自覺なり

一二、相對世界の真相

一三、生きんが為に働くべからず、働くが為に生く

一四、仏陀を近きに求めよ

一五、信念の修養は實際問題に如くはなし

一六、信せんと欲して信するに非ず、信せざるべからず

一七、靈化物化

一八、信するとは力を信する也

一九、自然の法則

二〇、仏陀の真実

二一、涅槃の極致、蘭林の遊戯

教主弥陀尊」といえる古聖の言は、今更の如く身に浸みます。確かに父母は此世に現れ給いたる仏陀の慈悲であります。仏の慈悲に接したる多くの人々に於いて、常に父母の導きと親しき關係のあることを發見いたします。

実に親は子の為に自己を捨て道理を捨て、或は慰め、或は戒め、種々苦労して下さるが如く、仏陀は私の為に永劫の昔より、一念一刹那も慈悲の眼を放ち給わらず、人が心配して気が狂う程に苦労下さつたお蔭で、漸く仏陀の御慈悲が分かつたのであります。

「弥陀の五劫恩恵の御苦労をよく／＼案すれば、ひとえに親鸞一人が為なりけり」とは、實に仏陀の大親に気がついた心中をよく言い顯して下さつた。今から思えば苦悶や病氣は勿論、生まれてから今日に至るまで、一として仏陀の深きを導きならぬはなかつたのであります。

世の苦悶懊惱し給える人々、人間の淺薄なる思慮を捨て仏智不思議の広大なるを仰ぎ給え。世の中の事、一とて仏のお慈悲の賜ならぬはありません。私は久しき間、自分が煩惱したことを言うのを避けて居りましたが、近頃同様に苦める人々が多い様でありますから、有体に懺悔して共に御慈悲を頂いて貰いたいのであります。そして私の心中は、全く阿闍世王の煩悶と符節を合せたるが

如く感じましたから、これも併せて叙した次第であります。

此書は昨年夏、信州飯山附近に於いて開かれたる修養会に於いて「歎異抄」を講じたる時の解題であります。それを信友佐崎津喜君が筆記して下さつたのであります。故に巻末に「歎異抄」を附加して置きました。是非これを熟読拝誦して、千古尽きざる慈悲の靈泉を味おうて下さることを希望いたします。

明治三十八年五月十八日

求道学舎に於いて 近角常観識

第十団版序

本書は私が入信の実験を披瀝して、阿闍世王の煩悶得信に比較し、歎異抄第二章の聖人告白の聖訓を鑽仰したつもりであります。しかるに「教行信証」にこの阿闍世王慚愧の涅槃経の文を引用せられたる所は、むしろ信後の悲歎として、その劈頭に

「誠に知りぬ悲しき哉、愚禿齋。愛欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、眞證の証に近くことを、快ばず、恥ず可し傷む可し」という聖人の御述懐があります。これ恰も歎異抄の第九章の聖訓と符合するものであります。

回顧し来れば私の懺悔も、入信の告白と同時に、亦信後

この講話を為したる時、自身の告白たりしことを想到するものであります。然らば則ちこの書は、私の一生涯を通ずる懺悔録と謂つべきであります。

本書は大震災の時、劫火の厄に遇い絶版になりましたが、今回全然版を新にせらるるに際し、一言所感を叙し、併せて本書を執筆せられたる佐崎師が、一昨年八月示寂せられたることを哀悼する次第であります。

昭和元年十二月二十五日

常観識

懺悔録

目次

第一章 緒言

第二章 罪惡と救済

第三章 予が信仰の経過

第四章 信仰を得たる人の実例

第五章 王舍城の悲劇

第六章 阿闍世王の懺悔

第七章 結論

附録『歎異抄』

以上

近角常観師を憧憬して

松村すすむ

私は明治十九年五月生れで、現在満八十余の馬齢を加えました。私が初めて近角先生にお目にかかりましたのは、今から六十年も昔で、私が田舎の中学校卒えて、東京の第一高等学校へ入学した折でした。当時一高の寮のあつた向ヶ岡は、本郷森川町の近角先生の求道学舎の近くでした。

私が先生のお宅へ伺いますと、いつも奥様御同席で、先生のお話を聴きました。先生は平生この奥様を觀世音菩薩の化身と称せられて、敬愛せられていたことは、当時先生の学舎に入れる人々の間で、もっぱら噂されて、微笑ましく思いました。時たま私はこの奥様のお給仕で先生と食事の御馳走を受けた楽しい思い出もあります。しかし私の一高、東大医学部の学生時代には先生から特別に仏道のお話を伺つた記憶はありません。

仏教信仰の上で私が先生の御教に接したのは、大正八年私が千葉医科大学教授に就任して以後のことです。

当時の千葉大学には、学生を主体とする仏教青年会があ

りました。そのはじめは大内青鸞居士の命名で「樹德会」というのです。この会名は明治天皇の教育勅語の中から選ばれたと聞いて居ります。偶然のことから、学生から所望されて着任早々の若かつた私が樹徳会の会長をやらされることになりました。

この樹徳会の性格は汎仏教的と云いましようか、固定した宗旨、宗派によらないで極めて自由なものでした。しかし私がお世話するようになつた後は近角先生の講話をお願いする機会が多かつた次第です。

近角先生の御講話は其後長い年月に渡つて大概、親鸞聖人の「歎異抄」を中心として、仏陀の大慈悲を解明せられたように記憶して居ります。

以上は近角先生と私との間柄のあらすじを述べたのです

が、私の特にここで申上げたいことは、今日私が八十の老齢に達しますまで、折に触れて私の心の中に、先生のいかにも慈愛にみちたお姿が彷彿として思い浮かぶことです。

人生の道

ウイリヤム オステー

私の若い頃、これからどうしようかと考えていたとき、たまたまカーライルの本を読んでいるうちに、

今更云うまでもなく、長い人生行路の間には、いろいろの出来事に遭遇します。若かつた元気な時代でも、自分ひとりでは生きて行けない人間社会ですから、他人との関係で、自分で思うようには物事がはこばず、時折には、いきどおつたり、ひがんだり、なやむことも多かつた。かようの際、私の心の中に先生のお姿があらわれて弥陀の大慈悲を感じ得するよう戒められます。取り乱した私の気持は平心をへます。

のに気がついた。今日だけが確かに自らの手にあるのでこの今日を大切に、今日に精進しなければならない。そのためには酒も煙草もやめて、今日を最上の条件において、ベストを尽すのがよいと思った。今私に何かよい過去があるとすれば、それは今日の積み上げたものに過ぎないのである。昨日でもない、明日でもない、ただ今日だけである。今日にベストを尽すところにこそ輝かしい過去があり、希皇のある未来がある。

満八十の歳末に際して、私の心に大法の恩師、近角常輔先生に対する憧憬の念がしきりであります。

オスラーは現在のシユワイツアーブ士同様に當時の世界の人々から尊敬され、慕われた人（一八四九—一九一九）である。カナダで牧師の八男として生れ、ペンシルバニヤ大学、オックス

ボロード大学の医学部教授となる。

友に導かれて

和才誠司

恩師近角常觀先生逝かれて二十六年、仏恩を感謝する毎に師恩を喜び、師恩を感謝する毎に、私の周囲関係者の恩に感謝を喜ぶ。

この地に同信会つじと云う集いがあり、十数年続いて居る。

私もその一員に加えて貰つてゐる。

る。境遇、性格等それぞれ異なる人が、各自経験した貴重な体験を語り合い、ひたすら同一念仏の道を歩みつづけているので、会員全員は、私の善知識である。不審な点はお互に納得が行くまで、徹底的に突き込んで談じ合う。

自己の領解を述べることは必要であるが、さて師の前に
出て姿勢を正し、改つて述べることになれば、自然表面を
飾り形式にとらわれ、実際から離れたものになる恐れがあ
る。

友と氣安く語り合つてゐる時、出て来る不平不満が、実は眞実の私であるから、安く語り合う友が、殊に必要である。友との交り、友情が深くなるに連れ、普通世間にて求めて得られぬ注告を、氣安く懇切に聞かせて貰うことが出来る。

他人の欠点はよく見えるが、事いやしくも自分のことになると、朦朧としてくる。人が聖典を得手勝手に解釈していることはわかるが、自分のことになると皆目わからぬ。

表面殊勝を粋い、心の奥底にひねくれ根性を潛めている私は、友から急所欠点を摘発せられ、逃場がなくなり、はじめて目が醒める。私が愚鈍なために、仏私をあわれみ給うて、友となつて導いて下されているのであるう。まことに勿体ないことである。

信仰は議論倒れになつてはならぬが、骨の髓まで徹底せねば解決せぬから、納得の行くまでよく語り合うことが極めて大切である。

蓮如上人が『ものを云え』と仰せられた教訓を身に沁みて感得し、讚仰の念を捧げずには居れない。

信心とか、摂取不捨とか、平生業成とか云うことは、單に言葉の問題ではない。慈悲に満足し、この世にて助かつた心に覚えのある人に接し、談笑の間に味わうことがありがたい。毎日私の身に降りかかつて来る出来事について、これを如何に處理すべきやの確信なく、常に迷い、常に行き詰るが、かかる愚鈍なものを憐れみ給うお慈悲ひとつを仰ぎ、なるほどそうであつたと、開かせて貰う、念佛の世界には、人の世の出来事が、すべて肯定せられ、私の関係者は、すべて善知識であり、師である。

友人大字佐平治さんが、大字式健康器を発明せられたことはかねて承知していたが、私が健康に恵まれているためあえて顧みなかつた。ところがはからずも今年春、大字さんから大字式健康器を贈与され、友人荒巻政次郎さんから、その使用法を詳しく教えて貰い、これを試みたところ身体の調子がすこぶるよい。このように重宝なものが友によつて作られてあるのに、愚鈍にして積極性に欠け、自ら進んで求める意欲がないため、友から器具を与えられ、そのうえ手をとつて、その使用法までも丁寧に教えられて、やつと健康器の恩恵に浴することが出来た、

終戦直後の列車輸送混亂の時、私は京都の本願寺に子供

ただ落ちていく

——花岡先生におこたえして——

西元宗助

にしてみようと思うのであります。

花岡先生、あなたの「自照」先月号のうつくしい御文章を拝見しまして、ますによりも、うるわしい友情にひどく心うたれました。そう申せば、かつてあなたが、児童文学の小川未明賞を受賞せられた時の祝賀会も、友情にみちた、まことに心あたたまる会合であります。このような純情な和氣アイといた集いは、そうめつたにあるものではないと思います。そして、あなたは、よい友とよい先輩と先生をもつていられる、つくづく思つたことであります。

そのあなたから、お友達にさしあげられたお手紙についてわたしに感想をのべよと仰せいたいたわけなんですが、全体的に至極同感と申しますより、教えられ感銘するところが多くて、御礼申したいだけであります。殊に友情といふことのこもつたお手紙でありますだけに。しかし、これだけでは、あまりにも風情があまりませんので、あなたの仰せの主旨を徹底させるためにも、次のようなことを問題題

を連れて参詣し、帰途京都駅で乗車出来ずに困つていたところ、大字佐平治さんの尽力によつて、やつと車に乗せて貰つたこともある。

この通り私は、友に導かれて、現当三世のご利益をよろこんで居る。

源信僧都の逸話

或時庭前に鹿來たりて草を食うを僧都見たまいて、とく追わしめ給えり。時に傍なる人、問うていわく。

「師、慈悲なきに似たり。なんぞ草を惜みて、鹿を追いたまうぞや」

僧都のたまわく。

「我もし鹿を追わんば、愚かなる鹿ついに人に馴れぬれば、悪しき人にも親しまん。その時殺されんこと必せり。我これを憐れむが故に、追い払うなり」

とぞ仰せられける。外相はしばらく慈悲なきに似たれども、内心ふかく慈悲あればこそ、かくなし給うなり。所謂心にあつて行にあらずとはこのことならん。

傾向の人々は、このんで「極限の絶望」をいい、靈光とか火花とか申します。そして、それは神秘的な宗教詩人のかたのうちに、その傾向のあることが認められます。リルケも亦大ざつぱにいえば、そのすぐれた一人であるといつても差しつかえないと思うのです。それだけに、わたくしはこのことを追及しようと思うのです。

それで、まず問題にすることは、極限の絶望ということが、その言葉の厳密な意味において、われわれにはだして可能であるかということあります。それは、あなたがお手紙のなかで「たえられはしない」と云つておられますように、まことに堪えられないものであります。そうでありますから、極限の絶望という言葉はあつても、そしてそのことを、よしや眞に体感したとしても、それは瞬間的一時的であつて、決して永続的なものではあります。したがつて極限という名には価しないと思うのですがいかがでしよう。

われわれはパスカルが「人生の慰楽」とよんでいるようなものによつて、たえず自己をごまかしてしまふほかはない。しだがつて、そこには「極限の絶望」という深刻な名目だけが空しく残つてその実の伴わないだけに、深刻そうで実は案外、本人も氣のつかぬ甘い想念だけに終つてしまふおそれがあるのであるのではないでしようか。すくなくとも私の愚かなことを、それもすこしばかり氣づかせていただく。これが凡人にひらかれた聞のありかただと思うのですが、いかがでしよう。

そしてこの場合、もつと肝要なことは、あなたの仰せのように入師にひらかれた聞のありかただと思うのですが、たくしの場合でありますと、そのお蔭で、あるころから、あることを縁として、どうしてもこうしても、今現に、助かりようのない、どこどこまでも落ちていくばかりの自分(機)であることにめざめさせていただいた。いや、そのことを信知せしめられたのであります。

○

にちがつまにしゆこう
日月摩尼珠光も、いわんやこの私が「なおし聚墨のごとし」と信知せしめられる、極限の絶望感もない、罪惡生死の凡夫とも思えない、思わない、無耳無眼のこの私が、罪惡生死の凡夫とは、地獄行きとは、他人様ではない、この私のことでありましたかと驚きはてる世界、独生、独死、獨去、獨來「絶対の孤独の絶望」とは、この私のすがたのことでありましたかと肯いていく境涯。ここに法が、本願が生々と躍動しております。

この意味においては、この私においては「淨土真宗に帰すれども」ではない、そういう資格もない。それは聖人であればこそいえること。われわれは、その聖人のお言葉をわが身に聞信して、そのお蔭で「眞実の心はありがたし、虚偽不実のわが身にて」と、ホンのすこしばかり氣づかせていただくというのが、いつわりのないところであります。

ひとびとはよく、罪惡感もしくは無常觀に徹底して、あなたの表現をかりていれば、極限の絶望のところにおいて聞がひらかれ、信心をいただくといいますが、そして、たしかにそのようにいえましようが、これはどういうものでしようか。そうではなくて、その真相は、平素の聞法のおかげで法がはたらいて、法がわれわれの機をあきらかにしてくだされる。そして、機(自己)があきらかになることによつて、いよいよ法が身についてくる。このことが宗教の宗教である根拠、ことに淨土真宗の特質というべきであると教えられています。

じつさい光顔巍々たる如來の容顔に照らされればこそ、

経験を反省すると、そういうことになるのですが。そしてこれが親鸞聖人の、自性唯心に沈むと仰せになつたことにつらなるかと思うのですが、いかがでしよう。

わたくしは、聞ということと関連して「孤独の絶望のなかで、わたしはじめて聞の世界がでてくるのではないかと思う」と。ここで「聞」ということを、あなたは力説されるのですがしかし誤解を招くおそれがあるのでないかと思われるのですが、いかがでしよう。

わたくしは、聞ということ、われわれ凡人の聞法ということは、ふだんに日常に心をかけてすべきことと聞きなつております。それぞれに悩み悲しみをいたいでいるものが、しかし、それは決して極限の絶望などと深刻にいえるものではなくて、それこそ人さまにもいえないような恥かしいつまらない悩みごとにすぎないかも知れないが、このようなゴタゴタした悩みごとに絶えず悩み苦しんでいるわれわれが、いたしかたなしに、それこそ求道などといえた義理ではなく、苦しみにまみれお寺に参つて、お坊さまのお話をお聞かせにあずかる。これが「聞」ということのはじめではないでしようか。そして、これが他人さまではなく、わたしの歩ませていただいている道なんですが、そしてそのお蔭で、ようやくお念佛申す身になつて、わが身の

にぴつたりしないのですが、論述の都合上、いたしかたなく申しあげるのですが——昭和五年の五月のある日のことでした。そして、その時から高唱念佛して、まったく有頂天になりました。しかし今にして顧みれば、このときから却つて一層ふかい迷妄の世界に突入したというべきでありますようか。そして、それからも、いろんなことがありますでした。

あるときは、ドストエフスキイの「カラマゾーフの兄弟」を夜を徹してよんで、あかつぎにいたり、突如、恍惚たるエキシタスの状態におちいりました。このときも入信のときと同じように、天地はさんとして光りかがやきました。そしてその後も、そのようなことがなかつたとは申せません。そして、その意味では、靈火とか火花とかいう独乙神秘主義のいうことも、入信とか自覺とかを強調せられる方の気持もわたくしなりによくわかるようあります。

しかしです。平素から、よき師とよき友にめぐまれて仏法のおそだてをうけてきた私には、それらを固執することが、ことごとく魔界であり、疑城胎宮・懈慢界であることを漸次知らされてまいります。もし入信というならば、それは眞の聞法求道への第一歩ということであらねばならぬことを教えられてまいました。

ともかく私は、右に述べたような経験をかさねればかさを罵つている逆説の私だけ。「神も仏もあるものか」と、どこまでも落ちていく私だけ。ただそれだけでありました。ところがです。しばらくして氣のついたことですが、そのどこまでも落ちていくこの私と一体となつて、ちようど影の形にそうように、いや、この表現のしかたですらも適切ではありません。この救われようのない、今現に落ちていく、この私の五体に泌みとおつていられるものがありました。それが、平素となえていたお念佛でありました。

しかし、それは決して、いうところの神秘的な世界ではありませんでした。感動的な興奮する世界ではありませんでした。それこそ寂かな自然な、それは長い暗い夜が、いつのまにかあけて、光が仄かに静かにさしこんでくるような世界、太陽がしずしずと地平線のかなたにのぼつてきて山野をてらし、そのためには私の暗い死の影がながく地上によこたわつているような世界がありました。

それはまた決して、たんなる喜びの世界ではありませんでした。むしろ人間であることの悲しみを業障を、いや、一切苦惱の群生海の叫喚の声のかすかにきこえてくるような世界がありました。じじつ、停車貨車のなかの仲間の一人お一人に頭をさげたいような、そのお一人お一人の苦惱の前にひざまずきだいような世界がありました。

まことに念佛申す世界は、特別な神秘的な世界ではあり

ねるほど、わるくなつていきました。じつき反省すれば反省するほど、ザンゲすればザンゲするほど、眞面目になろうとすればするほど、善にはげもうとすればするほど、自覚すれば自覚するほど、信心徹到といえは徹到したと思うほど、いや、さらにどこまでいつても無自覚な浅間しい自分であると悲泣すればするほど、わたくしはいよいよ高慢になり怠惰になり無自覚になり、奈落の底の底に、底なしの奈落に陥つていきます。ほんとうに自力は無功であります。

それに、そのころ、わたくしは人さまにもいえないことで、業火にただ身を燃やしました。花岡先生、わたくしはザンゲ録のかけるかたが美しいと思います。わたくしはザンゲ録は書けません。眞に眞面目になることも、眞に求道することも、眞に自覺することも不可能な人間であります。

その意味では、自分のことを浅間しいとか恥知らずとかいふ資格すらもない、それ以上のものであります。

それから、はからずも私はシベリヤに俘囚として送られることになりました。その途次でした。それまで私をささえていた筈の仏もなくなりました。リルケのいう「やさしく雙の手で受けとめている一人」のかたはなくなりました。それこそ無仏・無信、すべてがガタガタとくずれ去つてしましました。そして残るものは、ただ身体全体をもつて法

ませんでした。神秘的なものであれば、それは宗教的天才や哲人・賢者のみに許される世界でありますようが、そうではなくて却つて、宗教的天才や哲人等には無縁の、いや、このようなすぐれた方々と雖も愚にかえり庶民の世界に入つて、はじめていたけるもの、即ち一切苦惱の群生海において、はじめて身につくもの、それが願力自然の念佛であります。

わたくしの表白も漸く終りにちかづきました。しかし、ここでは非とも、おことわりしておかなければとか、あるいは、あのようく苦しむなればとか、誤つて受けとられるかたもあるうかと思います。それを私は深くおそれます。そうではありません。わたくしは、わたくしといふ人間の努力の一切が、いかにはかないかということを申しあげるこことよつて、如來の恩徳の如何に無限であり広大であるか、仏徳を讃嘆いたしたのにすぎません。

そして、衆生の苦惱に即して、いや衆生の苦惱にさきだつて、はじめに如來の願行のあるということ、その如來へ法によつて、われわれの機があきらかにせられて、自らにして摂取せられていく旨をあきらかにしようとしたのにすぎません。さればまた、わたくしの表白は、叙述の都合上、やむなく過去形をつかつておりますが、その本質は現在形であります。いま現に、たた落ちていく、いま現に

功かりようのない私であることを深信させられていることを申添えたいと思うのであります。

されば、ただ南無阿弥陀仏であります。けだし本願の念佛をとなえることは、おのずからにしてお助けになつていただきます。お念佛申すことは、おのずからにザンゲになつております。おのずからに感謝することになつていきます。お念佛申す世界は、おのずからに一切衆生の群生海（社会）が、自分の問題になることになつていきます。（尊号真像銘文による）しかも、お念佛こそは「ほんとうですか」と、どこまでも疑つていくばかりのわたくしたちに開かれる摂取不捨の白道であります。

（註）この原稿は自照誌の四十一年二月号に、児童文学の受賞者、花岡大学氏の「落下を受けとめていたる一人」の文が出、その時、花岡氏の求めによつて答えられ一文であります。「近来これほど一生異命になつたことはありません」と西元様が告げられたものだそうですが転載させて頂きました。

編者記

親鸞聖人の横顔

花田正夫

聖人に直接したしめには、教行信証あり、和讃あり其他沢山の御著述があります。然し聖人は自己をあまり語られなかつたので、御伝記で不明のところが多いのであります。幸に大正十年頃、鷲尾師によつて西本願寺の古文書

「去^{こそ}歳の十二月一日の御詫み、同二十日あまりに、たしかに見候いぬ。何よりも殿の御往生、中々はじめて申すにおよばず候。」

通をあげて聖人の御横顔を拝しましよう。それは弘長三年、

二月十日のものであります。『惠信尼消息』では第三、四、五、六通に出ているものであります。これは御子様の覚信尼が、聖人が御入滅された模様をその前年弘長二年十一月二十八日に細かに誌して越後の惠信尼公にお知らせになつた時の御返事であります。

いそのかみふりし御代にありとい、猿と兎と狐とが、友と結びあしたには野山に遊び、ゆうべには林にかえりかくしつゝ年の経ぬれば久方の天の帝のききまして、それがまことを知らんとて翁となりてそがもとによろぼい行きて申すらく、いましたぐいをして同じ心に遊ぶちよう、まこと聞きしがごとならば翁が飢を救いてよ、杖を投げてこいしに、やすきこととてややありて猿はうしろの林より木の実をひろいて來たりたり。狐は前の川原より魚をくわえてあたえたり。兎はあたりに飛びとべど何ものせでありければ、兎は心異りとののしりければ、はかなしや。兎ははかりて申すらく、猿は柴を刈りて來よ、狐はこれを焚きてたべ、云うが如くなしければ、焰の中に身を投げて知らぬ翁にあたえけり。翁はこれを見るよりも心もしぬに久方の天をあおぎてうち泣きて、土にたおりて、ややありて胸うちたき申すらくいまし三人の友だちは、いすれ劣るとなけれども兎はことにやさしくて亡骸を抱えて久方の月の宮にぞはぶりける。今の世までも語りつぎ、月の兎ということはこれがもとにてありけると 衣の袖はとおりて濡れぬ。

一、
其他沢山の御著述があります。然し聖人は自己をあまり語られなかつたので、御伝記で不明のところが多いのであります。幸に大正十年頃、鷲尾師によつて西本願寺の古文書から御内室の惠信尼公のお手紙が発表せられ、その後沢山の学者の研究の成果が出ております。それによりまして、惠信尼公の心にうつる聖人のお姿を拝することが出来るようになりました。

お手紙は十通ほどであります。その中で一番大切な数通をあげて聖人の御横顔を拝しましよう。それは弘長三年、二月十日のものであります。『惠信尼消息』では第三、四、五、六通に出ているものであります。これは御子様の覚信尼が、聖人が御入滅された模様をその前年弘長二年十一月二十八日に細かに誌して越後の惠信尼公にお知らせになつた時の御返事であります。

本師源空のおわりには光明紫雲のごとくなり音楽哀婉雅亮にて異香みぎりに映芳す。

道俗男女預參し、卿上雲客群集す

頭北面西右脇にて、如來涅槃の儀をまもる。

とはその讃歌であります。それにひきかえ聖人の御臨終には、覺信尼益方入道の二人の御子様と、御弟の尋有僧都と、御弟子顯智房・專信房等々の極く僅かの人々にみまもられながら九十年の天寿を完うされて大木が枯れるように静かに念佛の息絶え終られたことあります。

恵信尼はこうした覺信尼の不審に対し、まず「なかなかはじめ申すにおよばず」と前置きされて、日頃の所信を打ち明けられたのであります。第一に聖人の求道の有様をのべられました。

「山を出てて六角堂に百日こもらせ給いて、後世をいのらせ給いけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて示現にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月いでさせ給いて、後世の助からんする縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人があいまいらせて、又六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にもまいりてありしに、ただ後世のことは、善き人にも、悪しきにも、おなじように生死出すべき道をば、ただ一筋に仰せられ候いしを、うけたまわり定めて候いしかば、上人の道も淨土も、何等の救いとならなかつたからであります。

「觀像の念佛」ではなく、亂想の凡夫のための「称名の念佛」をはげまれたのであります。しかしそれは、阿弥陀仏を理想として称名念佛によつて近づこうとされる、他力中自力の念佛でありました。それは自分が如何ほどぎびしく真剣でありましたのも、それは自分の力に制約されて居ります、そこに不安と焦慮と点滅が限りなく続くのであります。聖人はここに、万行の中の一行為としての称名の一行為に及び難き身となられて、五里霧中の中に、叡山を下られたのであります。

かくて叡山を下られた聖人は、直ちに法然上人のもとをお尋ねにならずに、聖徳太子と御縁の深い六角堂の救世觀世音菩薩の前に百日の参籠をせられました。その時聖人が法然上人の吉水の禪房を御存じにならないはずはありません、すでに二十六年前に法然上人の淨土門はそこに開かれいて非常な勢いで伝波され、念佛の声は吉水にこだまする有様で、奈良や叡山の人々は目の上の瘤として非難の声は益々高かつたのであります。

それなのに直ちに吉水をお尋ねにならなかつたのは、すでに聖人は叡山で諸善万行の聖道の門を出て、易行念佛の淨土門を求められたのであります。御自身の力をもつてしてはその道すらも絶望のやむなきに至りましたので、聖

わたらせ給わん處には人は如何にも申せ、たとい惡道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いけれどこそありけめとまで、思いまいらする身なればと、様々に人申し候いし時も、仰せ候いしなり。

このお手紙に添えて別筆があります。

「この文ぞ、殿の比叡の山に堂僧つとめておわしましけるが、山を出てて六角堂に百日こもらせ給うて、後世の事祈り申させ給いける九十五日の曉の御示現の文なり、

御覽候えとて書きしるしてまいらせ候」
とあります。が、その示現の文は惜しくも失われて居りますけれど、この添え書きで、聖人が叡山で堂僧をつとめていたことが明らかになりました。

伝教大師以来、叡山は沢山の学生を集めて、立派な修行を遂げさせ、國の宝となり、國の柱となり、國の御用に立つ者を養成するのがその理想であります。そして立派な家庭の学生達は、その侍者として堂衆を持ち雜用をさせて居りました。一方叡山に住む僧侶に、導師、僧綱、凡僧、堂僧という序列がありますが、聖人は最も低い職位について居られ、常行三昧堂で不斷念佛衆をつとめて居られたのであります。

この聖人が叡山で、すでに源信僧都の往生要集を読まれまた善導大師の念佛の勧めも読まれて、「觀念の念佛」や

道も淨土も、何等の救いとならなかつたからであります。
その聖人にたつた一つの燈火として浮かんだのが、在俗のまんま篤く三宝に帰していられた聖徳太子であります。その太子の本地と伝えられる救世觀世音菩薩を安置せられた。やがて九十五日目の曉、太子の御示現の文を得られたのであります。史家の説では、太子廟宿侶であろうと推定せられていますが、その中に、

「太子は觀世音菩薩、太子妃は勢至菩薩、母后は西方教主弥陀尊である、末世の日本にあらわれて有縁を度し、すでに化縁がつきて、淨土に還帰するが、末世の人々のために遺骨をのこして一廟に三骨をまつる云々」

と云う意味の偈文があります。その偈文を誦された時、聖人は大いなるひらめきをうけられたことであります。それは淨土からこの地上に應現される弥陀、觀音、大勢至の尊容であります。今までこぢらから向うに進もうと一途に願われて、一分一厘も進めない身に絶望された聖人の上に、向こうから大慈大悲の本誓願があらわれて下さつて、親子、妻子手をとつて淨土に帰られる道を発見され喜びであります。ここに淨土の法門は聖人の胸に再びあたらしい光を帶びて感じられ、法然上人を尋ねられる機縁

が熟したのであります。

かくて六十九才の念佛圓熟の法然上人のもとに、降る日も照る日も、どんな大事をもさしおかれて百か日通われて生死出ずべき道を聞き抜かれたのであります。其時老上人は「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」と老少善惡の人をえらばれずに、一筋に仰せられたのを聞きとられました。その道は、我等如き煩惱具足の身、出離の縁の無き者を、阿弥陀仏がすでに見抜かれて、その者のためにえらびとつて下さつた大悲廻向の念佛であります。

それからといふものは人が様々に批判するような時にも、もとく地獄一定の身であるから、念佛申して地獄におちたといふましても、上人と御一緒だから後悔することはありません、と常に仰言つて居られました。

二、

次の文によりますと、常陸の下妻(しもつま)というところで、惠信尼公は夢を見られました。それはひかりばかりでお姿のない、勢至菩薩としての法然上人の尊像と、仏様のお顔をせられた観音菩薩としての親鸞聖人のお姿であります。その時親鸞聖人のことは秘して、法然上人の夢を聖人に打ち明けられると、それは実夢である、法然上人を勢至菩薩の化身と夢に感じる人は沢山あるから、と仰言つたので、それからと云うものは尼公は口では申されなかつたけれど、聖

人を心の奥深く觀音菩薩の御化身と信じて来られました。そのことを御息女の覚信尼に打明けられて、そういうことでありますから、聖人の御臨終の有様がどんなお様子であろうとも、往生成仏せられたことはすこしも疑うところはありません、今更こと新しく申すには及びません、と述べていただけます。

さて惠信尼公が斯うした夢を聖人御在世の時は心に深く秘めて誰にも口外せられなかつたばかりでなく、聖人御入滅後も他人に晴れがましくお語りになつたのでなく、我子の覚信尼の不審を解くために、臨終まつことなく来迎をたのむことも要のない、平常に往生の大事が決定していられた聖人の実状をそのまま打明けられたのであります。

この御手紙を拝読しながら、私共の襟を正さずには居られませんことは、御夫婦でありながら、心中深く觀音菩薩の化身として拝まれたという事実であります。それにつきまして聖人卅一才の六角堂の觀音の夢想の事件であります。

行者宿報設女犯（そなたが前世の約束として妻帯するよ

うなときは）

我成玉女身被犯（その妻に自分がなるであるう）

一生之間能莊嚴（一生の間立派にくらしていくつて）

臨終引導生極樂（臨終には必ず導いて極樂に生まれしめよう）

三、

最後に、文書の第五通にあります、添え書も聖人を拝するに大切な記録であります。

ここに聖人御自ら、御口には出されなくとも、惠信尼公をひそかに觀音の化身として念じていられたのであります。それが自然に感應道交して互に觀音としてうやまわれたのであります。

そうした聖人の信味の淵源は、太子の廟窟側

我身救世觀世音 定慧契女大勢至

生育我身大悲母 西方教主弥陀尊

の一節にあります。太子の御家庭生活がすでに三尊の応現(おうげん)としての莊嚴極まるものであります。

更に遠く、華嚴經の入法界品にある善財童子求道物語において、童子が五十三の善知識をたずね、最後に身近い知識として、御妃の嬰畏女様と、母后摩耶夫人がありますことを想起いたします。

これこそ仏智のかがやくところ、最も身近かな家庭の上にあらわれる淨土返照の徳光であります。私共煩惱に盲目たる身は、愛欲の廣海に沈没して仲々そうしたひかりを得ませんけれど、こうした家庭の莊嚴こそ本来あるべき姿と聞かされて居ります。そこにこそ唯信抄の末文の「我おくれなば人に導かれ、我さきに立たば人を導きて、世々に善友となり生々に知識となりて、永く迷執を絶たん」との白道上の永劫の伴侶が見出されるのであります。その理想的生活を聖人の御家庭にうかがえることは、私共はそ

善信の御房、寛喜三年四月十四日、うまの時ばかりよりかざ心地すこしおぼえて、その夕ざりより、臥して大事におわしますに、腰膝(こし)をもうたせず、てんせい、看病人をもよせず、ただ音もせずして臥しておわしませば、御身をさぐれば、あたたかなること火の如し、かしらのうたせ給うこと、なのめならず。さて臥して四日と申すあつき、苦しきに、まはさてあらんと、仰せらるれば、何事ぞ、たわごとにや申すとかと申せば、たわごとにてもなし、臥して二日と申す日より、大經を読むことひまもなし、たまたま目をふさげば、經の文字の一字も残らず、きららかにつぶさに見ゆるなり。

さてこれこそ心得ぬことなれ、念佛の信心よりほかには何事か心にかゝるべきと思って、よくくそ案じてみれば、この十七八年がそのかみ、げにくしく三部經を千部読みて衆生利益のためにとて読みはじめてありしを、これはなに事ぞ、自身教人信、難中転更難とて、みずか

ら信じ、人を教えて信せしむること、まことの仏恩を報い奉るものと信じながら、名号のほかに何事の不足にて、必ず経を読まんとするや、と思いかえして読まざりしことの、さればなおもすこし残るところのありけるや、人の執心、自力の心はよく思慮あるべしと思ひなしてのちに経読むことはとどまりぬ。

さて臥して四日と申すあかつき、まはさてあらんとは申すなりと、仰せられて、やがて汗たりてよくならせ給いて候いしなり。

三部経げに／＼しく千部読まんと候いしことは信蓮房の四つのとし、武藏の国にやらん上野の国にやらん、佐貫と申すところにて読み始めて四五日ばかりありて思いかえして読ませ給わで常陸へはおわしまして候いしなり。

信蓮房はひつじの年、三月三日の日に生れて候いしかば今年は五十三やらんと覚え候

弘長三年二月十日

惠信

このように聖人五十九歳の頃の出来事が附記されてあります

が、聖人が風邪氣味で熱も高く頭痛もひどいようでした
たが「今はさてありなん」と独り言を仰言るので、どうな
されましたかとおたずね申すと、「実は大經の文字が次か

ら次にと目に浮かぶのでどうしたことかと思案してみると、今から十八年前三部経を千部読んで衆生利益をしようと思ひ立つたことがあるが、すぐその後、名号を信じそのよろこびを人々に分つほかに真の報恩の道はないとかねて聞いているのに、本願の名号以外に読經をたのむというのもつての外であつたと氣付いてそのままやめてしまつていた。それが今度風邪氣味で臥していると経の文字が一字々々目にうつった原因であつた。一度思つた執着心はまさにおそろしいものだと知らされたので、すつかり経の文字も浮ばなくなりさっぱりしたのであゝそうであつたかと云つたのである」と聖人が語られました、と惠信尼公が書き加えられたのであります。

この文書について、種々と学者の意見が出ていまして、聖人の三願転入は四十三か五十九のこの頃であると説く人もありますが、それでは教行信証に聖人御自ら述べられました「建仁^{かのと}酉^酉の暦、雄行^{ゆきよ}を棄てて本願に帰す」がうそとなり「これ専念正業の徳なりこれ決定往生の徴なり」と悲喜の涙をおさえて由来の縁をしるされたことがむなしことになります。

さて白杵祖山老師の名言として

「三願転入とは十九願（諸善をたのんで往生を願う者）から二十願（自力の諸善に挫けて仏名を称えながら、称え

以上、三つの大切な聖人の信昧を惠信尼文書から教えられ、聖人の御横顔を髪^{はつ}髪^{あつ}とさせて頂きました。

ゲーテの言葉

ごころに執着している者に入り、更に十八願（絶対他力の信界）に転入するのであるが、いよ／＼十八願におさめられる

ると、そこで万事解決して、信仰一点張りでサラツと

するかと言えば、実際はそうはいかぬ。十八願の世界に転入せしめられて、そこに腰をいれると、十九、二十の願の世界に迷うて行く自分の姿が見えて来るものがある

と福島先生からおききしております。このように十九、二十の願に未練を持つてさまよう身に、仏の智慧と慈悲が働くいて下されて、その心持を常にとかされるのであります。これが摂取不捨の光^{めぐみ}益^{めぐみ}であります。逃げるものをむずと捨て放したまわす。引き戻して下さるみ手のたしかさに退転することのないのもしさを感佩するのであります。

「摂取不捨の故に正定聚（正しく淨土に生れる者）の位に住す」とはその消息であります。子が母の手に抱かれて安んずるのは、その抱く手のたしかさによるのであります。

安波歟八氏の絶筆に

「仏の慈悲を有難く思える様になつた事が有難いのでは
ない。あり難く思えぬ奴を相變らずお相手下さることが
ありがたい事である」

とあります。が、摂取不捨の目當と、その力強さを信嘗せしよ^{しんじょう}ります。

られた貴重なもので、正定聚の世界がそこにひらけており

真理は久しい前に見出だされた。

氣高い精神はみなそれによつて結ばれた。

古く伝わるその真理をつかめ！
大地の子よ、大地やその姉妹たちに
太陽をめぐる軌道をさし示した
あの賢人に感謝せよ。

みのりゆたかなものだけが眞実である。

さとがき



年祝ぎに何はまほさむ念佛に
生くる喜び祝ぎ言とせむ
は心に深く刻まれます。又山村信子さん
の御名ここにありて雑煮のめでたさよ
池山先生の
歳旦をまずおとずる念佛かな
は御名に明ける新春の旭日がうかがわ
れます。

- ※毎月第一、二、三日曜、一道会例会。
午後一時半。
- 市電、新郊通り一丁目下車、東入ル
三筋目左入ル。

年頭をまずことほぎ奉ります。
鶯のこえを聞きつるあしたより

春の心になりにけるかな
うぐいすのたえてこの世になか

りせば春の心はいかにあらまし

良寛師の歌であります。数年前ま
では私共の住居の小庭にも鶯が来鳴き
ましたけれど最近はとんと聞けなくな
りました。鶯の声は私共のよくな俗耳
にも何とも云えぬ微妙さを覚えます
が、良寛師にはどんなにか嬉しい声で
ありましたでしようか。

然し、よき人の仰せに、仏の御名を
聞かせて頂けますことは何というよろ
こびでありますようか。御名のきこえ
るところそこに春の心ならで淨土の香
りがただようてまいります。或年の元
旦の柳瀬様の歌

常観先生の直々のお導きを永年うけ
られました方々も次第に浄土にかえら
れましたが、今年頭に、千葉の松村
様、福岡の和才様の原稿を頂けました
ことは有難いことです。

次に西元宗助様は今春半ヶ年間北米
各地を巡回されて法縁を結んで下さる
ことになりました。大学のお仕事や各
地のお活動に席のあたたまるこな
い中を半年間の都合をつけられての出
講、御無事を祈念申しております。
機に「ただ落ちていく」の原稿を頂
きました。

定価	半 年	二百円(送共)
	一 年	四百円(送共)
名古屋市南区駄上町二ノ八八		
編集・発行人 花田 正夫		
電話八二一局七〇三七番		
愛知県西加茂郡三好町大字福谷		
印 刷 入 本 田 政 雄		
名古屋市南区駄上町二ノ八八		
發 行 所 慈 光 社		
振替口座名古屋一〇四七〇番		

御案内